社会　社会とつながり、追究意欲を高める

POINT 1 態度　身近な社会的事象との出合いから追究意欲を引き出す工夫

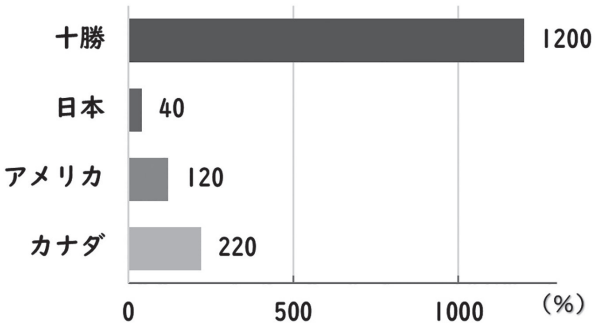
小学校学習指導要領解説社会編では第５学年における「学びに向かう力、人間性等」に関する目標について以下のように述べられている。

> 社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとは、学習問題を追究・解決するために、社会的事象について意欲的に調べたり、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考えたりして、調べたことや考えたことを表現しようとする主体的な学習態度を養うようにすることである。

５学年の教科書では、より日本全国や世界に視点を広げた教材を扱う。「子どもに実感を持たせるのが難しい」といった話を聞くのはそのためだと考えられる。子どもの「なぜ？」「どうして？」につなげた学習問題をつくるためには、一工夫が必要になるが、子どもが扱う教材に実感をもち、学習問題が自然と生まれてくる工夫をした実践例を紹介する。

５学年の単元「これからの食料生産とわたしたち」では、食料自給率について学習する。ここでは、単に日本の食糧自給率の数値に対する関心を高めるだけではなく、十勝の食糧自給率の数値を示すことで「なぜ？」「どうして？」がより実感をもったものになると考えられる。

また、資料の見せ方として、マスキングなどをしておき、順に予想しながら見ていくことにより印象が際立ち、効果的であろう。



【食料自給率のグラフ】

実際の授業でも、子どもたちにとって身近な地域の数値が見えてくることで、「広いから」「気候が適している」「豊かな大地」などの既習事項を踏まえた考えや、「自分たちに何かできることはないか」「十勝ってすごい」といった願いや思いが子どもの中に広がっていった。

これにより、学習問題『日本の食糧生産にはどのような課題があり、これからの食糧生産をどのように進めたらよいのだろう』と子どもの思いが自然につながったと考える。また、郷土の未来を意識した学習にもなっていった。

次の視点を意識して学習問題を設定することで、子どもたちの追究意欲がより高まるであろうと考えられる。

- 身近な社会的事象との出合いの工夫
- 子どもたちの思考にズレ（あれ？どうして？なぜ？）を生ませる
- 多様な「見方・考え方」が生まれる仕掛け

ための学習問題と教材化の工夫

池田町立池田小学校　教諭　堂藤　嗣郎

POINT 2 思・判・表

効果的な学習展開を見通した教材化のポイント

子どもたちの追究意欲が高まる学習問題同様に、学習活動には適切な教材選びが必要不可欠であると考える。その教材で子どもがどのような興味・関心をもち、どんな見方・考え方を働かせるかをはっきりさせておくことが教材を最大限に生かすことにつながるであろう。

次に紹介するのは「日本の食料生産の特色」の実践である。この単元では、身近で個人差なく共有できる教材として給食を選んだ。食材に国産（道内産・道外産）と外国産が含まれている日のメニュー（シチュー、オレンジ、パン、牛乳）を選択し、以下の資料を用意した。

資料①：産地の一覧表（牛乳：管内、小麦粉：外国、みかん：道外、ニンジン：管内、ジャガイモ：管内、玉ねぎ：道内）
資料②：材料の都道府県別生産量のグラフ

都道府県の面積を根拠とした予想と矛盾する資料を提示すれば、子どもの「なぜ？」が生まれると考えた。

北海道が１位のものが多い
十勝産が多い
北海道は土地が広いからたくさんとれる？
みかんは道外が上位
外国産も入っている

あれ？
なぜ？

資料を見て気付いたことをClassroomのコメント欄に入れ、交流した。

食材によって産地が違う

生産量が多い理由は、面積以外にもありそう!

学習問題

普段食べているものは、なぜその産地で作られているのだろう？

今回のメニューでは、生産量は北海道が１位の食材が多い。そのため、生産量と面積を結び付ける子どもが多かった。しかし、面積を根拠にできない食材もあり、その産地で作られる理由について興味・関心が高まり、学習問題につながっていったと考えられる。

この後の追究活動では、生乳→冷涼で広大な北海道、みかんの産地→南の地域が多いということに気付き、食料生産には気候という自然条件が関係していることがわかった。

また、パンの原料である小麦は輸入が多いという気付きから「どうして国産を使わないの？」という新たな問いが生まれ、価格や品質へと視点が広がった。さらに、国産品の輸出が伸びていることから食料生産の未来に関心をもつことができたと考えられる。

このように子どもがどのような興味・関心をもち、見方・考え方を働かせるかをはっきりさせて学習を展開させることが、教材を最大限生かすことにつながると思われる。ごく身近な教材も大きな効果を生むであろう。